

37

大正九年九月以降
越後北越新報所載

回顧錄資料

雙魚池閑話

特別

14

1919

316

85

80

75

70

65

門 14
 1919
 37

門 15
 1880
 37

雙魚堂閑話

初對面錄

○嘗外交を論ずれば睡最も賢と云ふ古語がある、書に親むかなくば午睡をする

と云ふ事は支那流よりすれば賢である、様だが生憎自分は午睡を好まない、折柄北越新聞の記者が見えて开んなに無事に苦むなら又例の雙魚堂叢話でも試みて貰ひたいものだといふ注文が出た、自分も永らく紙上に御無沙汰を續けて居るのであるが丁度一萬號の紀念號も出ると云ふ事だから、ソレちや午睡に代ふるに又々詰らぬ雑談でも試みやう、それには差向き多少人物評らしいものを先づ試みて見やうと云ふ事にした。初對面録は斯うした譯から企てたものである。

○西洋の諺に First view is best view. 初めの見えが一番好い見えだと云ふ事がある、つまり人に接するに當り一番初會の

時が最もよく其人を洞見し且つ最も深く趣味を感じる者だと云ふ意味であらう。兎角交が深くなり屢々其人に接する時は、所謂廬山に入て廬山の面目を知らずで却て其人が分らぬ様な端目に陥る事が多い、少くとも餘り趣味を感じぬ様になるのが普通だ、是に於て初對面と云ふ事が大に興味のある處である。

○嘗て友人志賀知川君が初對面録と云ふ題にて何かの雑誌に十數の人の評した事がある、それは十數年前の事に屬すれども仲々面白く書かれてあつたので今猶自分の記憶に存して居る、自分が今初對面録を試みやうとするのも幾分知川君のものが印象に残つて居たのも動機の一つだ。併乍トテモ知川君の如く面白く行かうとは思はれない、知川君は其人の性格などを出来る限り精細に描寫してあつたが、自分には今其暇もなければ又それ程の積りもない、只或機會、或場所に於て或人に初めて逢つた時にフト感じたと云ふ事に過ぎないのである。

○期様な筋合で随て念頭に浮べば随て話ると云ふ譯であるから順序などは一切構はない、いろくの人物が錯綜して出るものと承知して貰はなければならぬ。且つそれも初めて試みる譯であるから十人か十五人で種が盡きるか或はそれ以上になるか、若し種が盡きるか興が盡きるかすれば又他の題目に移るかも知らない。是譯め讀者にお断りして置く處である。

雙魚堂閑話

初對面錄

伊藤春畝公

○春畝公が朝鮮の統監時代に聊かの病に罹られ、丁度自分が熱海に居つた時突然公爵の御入來と云ふ事自分等も部屋を追拂はれ、公は屬僚看護婦を擧げて引連れ熱海の樋口屋へ來られた事がある。其際毎



昭和十六年十月十七日
 市島謙吉

晩公はブランドを借りながら偶々東京から来てゐた落語家を招いて興じ、自分の如きも毎晩傍聴仰付つた事があった。○併し自分の公に初見は其以前で永田町に統監府の出張所の設けられてあつた時だ。自分は或用を帯びて朝早く訪問した。時間は僅か八時頃と記憶するが案内されて公の前へ出ると、公は統監府の事務室に充てられて居る極めて狭い長方形の室にテーブルがあつて其處に居られた。朝の早いのに既に統監の制服を着て例の如く葉巻を煙ゆらせながら極めて快活な態度で、自分で接待用の椅子を適當の處へ運んで来てそれに着けと言はれ、直に要談に取掛ると仲々鄭重な挨拶で、忽ちの間に要談の擱きがついた。

○公は自分の名刺を見て居られたが自分に對つて貴君は金澤に別荘を持つて居らるかと問はると、金澤には公の別荘に隣つて同姓の別荘があるのでそれに就て問はると、あらうと氣付いたから、それは親戚の別荘であると答へた處が、ソウか吾輩も隣家であるから時々往來して懸念である、アレは貴君の何に當る人か

○伯は笑ひながら「ソコが伊藤の本色だ伊東や末松には亂暴だが君なんぞに對しては如何に居る處と打つて變り如何にも意外であつたのを怪むで、他日大隈伯に此事を語つた。

○伯は笑ひながら「ソコが伊藤の本色だ伊東や末松には亂暴だが君なんぞに對しては如何に居る處と打つて變り如何にも意外であつたのを怪むで、他日大隈伯に此事を語つた。

「は違ふ」と言はると、自分は之を怪み再び何故ですと眞面目に問ふと、「ソリヤ君等は怖はいからサ、そこらは仲々要領が深い」と答へられた。其時また早朝公館を訪ふたるに既に儼然と統監服を着けて胸邊には勳章まで輝いて居つたと語つたら、伯は笑ひながら「ア、お仕着せを看けて居つたか、そこらも伊藤の本色だ」と言はれた。

初對面録 三



○板垣伯には前後一回しか逢はぬ、しかも其逢つた時は今より廿有餘年前で自由改進兩黨激争の頃であつた。當時の自分は寧ろ板垣伯反對の黨派に屬して居たもので有たが或る據らない關係から黨の用向で伯を訪問した。○當時板垣伯は芝公園第何號と云ふ様な極めて尋ね難い處に住居せられて居たので方々探して漸との事で番



一種の焦味を帯び自分等も青年時代には頗る之を愛讀し従つて其人に對しては切に欽慕の念を馳したものであつた。併し其人と初めて會したのは居士の晩年で大隈伯の邸に於てである。其際誰とも知れず袴も着けず縞の羽織と云ふ打扮でどちらかと云へば優形の人が伯の面前に或は起つたり或は座つたりして何か語て居る。○話も極めて平易で顔を見れば商人肌と見えないが併し様子は商人風にも見え學者肌、政治家肌などと云ふ處は微塵氣もない。それにしても伯に對して一寸倨傲の様子が何となく見受けらるゝので實は何人であるかと判じ兼ねたが、暫くして伯から中江君であると云ふ紹介を得初めて兆民居士なる事を知り、實に想像意外であつたのに驚いた。此人が拂蘭西育ちでまた矢張り過激な議論を唱へ奇抜な文章を書き、自分の青年時代に崇拜の目的物となつた人であるとは何うしても受

雙魚堂閑話

初對面録 四

○兆民居士の文章は何人も知る如く

取れない気がした。それから何か話をし
て居る中に何か所謂中江流を認むる事が
出来るであらうと待構へて居た。
○スルト其中に談は酒の事に亘つた酒は
居士の嗜む所なるは兼て知て居るので、
此話の中に居士らしい所を認められるに
相違ないと注意してゐると果して然りで
あつた。居士の曰く、自分も感ずる所あ
つて近來酒を己めた、併し多年飲んだ酒
を一時に廢すると云ふ事も出来ぬ、そこ
で晚餐の時に限つてコップ一杯の酒を膳
部の中へ入れイザ飯を食ふと云ふ時にグ
ット飲干すのを例として居る、此時は酒
と思はずに飲むので丁度膳部の汁を啜る
と同じ格で遣るのだ、之が自分の發明
で至極禁酒の名法だ、それで懇親會など
と云ふ場合にも幾ら人が、盃を獻しても
決して受けず矢張り其際にも膳部に、一
杯だけ供へてイザ食事の時となつて引掛
ける、斯様な折衷法でなければ絶對の禁
酒は出来るものではない、と云ふ説であ
つて、成程こゝらが中江流だなど聊か其
味を認めた。

初對面錄 五

▲服部誠一氏
○今は故人となつたが明治十年前後非常
の名聲を博した服部誠一は東京繁昌記を
以て知られ、其艶麗なる筆は一時期に受
られたものである。一体此種の文章は云
ふ迄もなく支那小説から脈を引いたもの
で、彼の寺門靜軒の江戸繁昌記、成嶋柳
北の柳橋新誌の如き凡て脈を支那小説に
引きそれが仲々當時に行はれた者であつ
た。そこで服部の文章は靜軒、柳北に比
すれば文品は下つたには相違ない、併し
幾分卑俗である處から俚耳にも入易く、
却て當時には廣く行はれたもので、斯様
な處から服部が艶麗の漢文を弄した東京
新誌と云ふ雑誌も發行され、一時盛んに
賣れたものである。
○自分の服部に初めて逢ふ時は明治十
五六年の頃で或新聞を協同して起した時
である。其時分新橋の橋から向つて左側
の二三軒目の先に「九春社」と銘の打つた
塗屋があつた。これ即ち服部の本營即
ち東京新誌の發行所であつた。自分は案

○之はまた他の時であつたが、嘗て十行
廿字詰め二枚位の原稿に、續けて狂詩を
書いて居た事がある、此時に矢張りブツ
ツケ書で見ると韻を疊むで立るに長篇
をなすと云ふ達者なのに敬服した。此人
の門人で三木愛花と云ふ人は今猶存して
居る様であるが、此人には一年計り新聞
を協同して作つた關係から交際した切り
其後十數年逢ふ機會がなかつた。
○兎に角明治小説史の前期には此の如く
一時支那小説體のものが流行した時代が
あつたが、其中撫松子の如きは實に其雄
なるもので、今其文章を讀むでも面白く
感ずる事がある。

雙魚堂閑話

初對面錄 六

▲首藤陸三氏

○惜か明治十八九年頃と記憶するが政黨
騒ぎの激烈な時に江東の中村樓に黨派
の大會が開かれ全國から馳参したものが
約千を以て數ふると云ふ程非常の盛會で

通つて茲に初めて服部に面會した。此時
第一意外に感じた事がある、ソレは彼が
如く艶麗の筆を弄し殊に狹斜の情話など
を得意とする人は定めし江戸ッ子風の頗
る粹な人であらうと暗に想像して居た處
が、實際に逢つて見ると反對で、滿面の
痘痕で、且つ撫松と云ふ雅號が顯はす如
く會津出身で、江戸に永らく居りながら
談話を交へると會津人丸出しで、殆んど
二三日前漸く田舎から飛出して來たかの
如く見えるやうに響いた。
○併し服部は色々の風波に當つた爲め内
實は餘程東京化して居ると云ふ証據には
如何にも應接が巧みで人を外らさぬ處が
ある。暫く話を交へると撫松子の曰く、
其だ失禮だが今之を書とる處であるから
暫く御免を願ひたいと云つて、机に居た
れて何か原稿の筆を操り初めた。自分は
其傍に見て居ると例の艶麗の漢文を弄す
る所で、筆に委せてズン／＼書いて行き
一字を書きながら漢文の返り點を共に書
いて行くと云ふ様子などは如何にも達者
なもので、成程之は非常に書慣れたもの
だと感服した。

あつた。其際自分も出席して歸らうとす
ると脊の低い小作りの年の頃卅七八歳位
でもあらうか大勢を押分けて自分を追尾
して來て、貴君は誰々ではないかと呼び
かける、そこで自分は貴君は誰かと問返
して初め首藤陸三氏である事が知れた。
○ア、別席と云ふ事一所に行くと、首
藤氏は誠に久しい御對面だが實は私も貴
君の郷里には新瀉學校の初期時代會で教
鞭を執つた縁故がある、其等の關係から
新瀉と云ふと自分も懐かしい感があるの
で新瀉の新聞なんぞも始終見て居る、そ
れに就て貴君に感謝しなければならぬ事
がある、それは貴君が黨派の爲めに書か
れた幾多の論説を此七八年來讀んで其お
陰で頗る啓蒙する處がある、今日は實に
貴君の見えて居ると云ふ事を出席名簿で
知つて禮を云ふ爲めにお呼留をした譯で
あると云ふ事で、之が後日同じ黨派の
事務所で日夕互ひに談笑する第一着處で
あつた。
○首藤陸三先生は新瀉學校の創立された
時分尺振八氏の高足として遙かに仙臺よ

り聘せられた英學者であつた。自分等は
其時分新瀉學校へは行つたがまだ年少で
直接首藤先生の教育を受ける事も出来な
かつた位のもので、只先生の風采を見、
アノ大先生に教はる程にならねばならぬ
と志を勵した様の事で、爾來廿年に垂
んとして東北の方面に同じ黨派に屬して
此人ありと聞くのみ會つた機會もなか
つた人が、今日圖らずも相會し、却て其
時分の所謂又弟子に對して禮を述べらる
ゝに至つては誠に意外にて其際程今昔の
感に堪へなかつた事はない。それから後
首藤氏と共にいる／＼の會に招かると折
などは、首藤氏が毎も其事を言出して
吾輩の門下にも斯様な偉い人があると吹
聴さるとので頗る恐縮した事があつた。
○首藤氏が新瀉に居た時に一つの逸話が
ある、氏は古町の秋田屋に止宿して居た
が或時縣廳から袴着用で出頭せよと云
ふ達しがあつた、然るに氏に持合せがな
いのは勿論當時廢れてなかつたので、折
節秋田屋へ宿り合せた義太夫語りの金紋
天鵞絨の袴を借着して堂々縣廳へ出頭し
て縣官一同をアツと言はせた事がある。

元來か美男子で風采よく、生徒にも渴仰されたものであつた。

理 成

の事社から原稿の催促が来たのを見ると、幸田露伴



○自分は現今は露伴とは非常に懇意であるが、抑も初めて露伴に逢つたのは自分が東京某新聞の主任時代であつて、露伴も同新聞の社友であつた時だ。自分が入社する機会だ露伴に逢ふ機会がない、或は日

初対面録 八 ▲幸田露伴氏

○越えて二三日後自分は朝編輯局へ出掛けて見ると、自分の座の近邊に横臥してゐる男がある、彼の羽織がなにかの矮少の男で、一癖ありそうな顔付の上に極めて横柄な態度であるから、之は誰かと思ふたものと、先方も挨拶せぬから、此方も黙つて居ると、傍らにての雑談の中に此頃の死去廣告云々の話が出たので、之が露伴であるかと初めて知つた。
○何か此方から物を言ふても碌々挨拶もせぬと云ふ調子で一見變物であると思ふ事が分り、之が抑も初見で、終に非常の懇意となつたが、今こそ露伴も大分世故に慣れ幾分か圓滑になつたが、其當時は餘程天才肌な従つて頗る曲くれた人物であつた。

らとそ

雙魚堂閑話

初対面録 九 ▲伊東巳代治子



○一代の才人伊東巳代治子に逢ふたのは其全盛時代でなくして益壽家として晦れた後の事であつて、憲法上の或る疑問に就て聊か質す處があつて、訪ねたのが初めてである。○子の邸宅は越前守田村に在つて少し坂をなして居る處をよると、成程一方途の一面に圍ひがしてあつて盛んに盆栽の鉢が陳列せられ、子の趣味の標本が先づ玄關前に認められた。玄關に訪ふと其處からは通されずして左側の庭の方に廻はれと云ふ。小やかなる門を潜ると其門には春畝公の書かれた「晨亭」と云ふ額が掲げられ、庭の飛石を拾ひながらあたりを見回すと成程件々奇趣を構むるものであつて此に離家がある、恐らく母家に續

いた離座敷であらう。其室へ通つて見ると、其は長亭子の居室と見えて、唐物づくめの装飾目を驚かす計り、自然木の高卓、別竹の物、明人の書畫一物一品骨董趣味のある自分から見て仲々下には置きぬもの計り、それが巧みに配列されてある。庭を見回すと、此にも盆栽の置場が設けられ、数百の鉢が並んで居り如何にも趣味を以て置かれて居ると云ふ有様である。懸て長亭子出て来て挨拶に及ぶと、仲々元氣鼎んなもので、

止味の裁よりも確かに十歳位は若く見え。容貌で、切りに盆栽の講義が初まつた。子の盆栽は大隈伯などと違つて自ら技師を遣つて居る位であるから従つて其盆栽は仲々黒人の域に達し頗る趣味のある話である。併し自分の今日訪ねた趣意は憲法上の問題であるから、ヤツトの事は其談を外づして本問題に入ると、子は頭を掻きながら、憲法制定の頃の事は秘に属する事が多いから一寸困るけれども前置をして、併し差支へない事だけとお話しやうと云ふ事で種々語られた。

其時分の書生は今時の書生と違つて、酒などは餘り解さぬ方であつたが扱て斯うなると卒先するものが無い、其連の中に最も酒量のあつたのは自分であるが、躊躇すると叱らるゝが口惜しさに自分卒先の役を勤めて酒を注いで貰ふと、先生徳利を下へ御さすに飲むのを待つて居ると、ソコで己むを得ず飲干すと今一杯飲めと言はるとの閉口して、餘り酒が飲めるなど云ふ事を知られては、幾杯飲まさるとか分らぬから強て辭してそれを次へ回はした、中には飲めない人もあつたが、先生は儼然たる態度で、其位のもが飲めぬ様では何うも大事は爲せぬと云ふて、何だか不興の様に見受けた、先生は他に強ゆる計りでない、自ら獨酌で遣つて居ると、近頃は何うであるか酒量の消息は聞かぬが、仲々有名の酒豪であつた。

○其中憲法の某條に關して伊藤公と大議論をしたと云ふ話が長亭子の口より出てそれを二三分説明されたが、其伊藤公との間に交換された激論の有様に及ぶや當時の實況を眼前に見るが如く、其話の中は顔色血走り語氣激昂、如何にも屈しなかつた様子が歴々と見えて、自分は其時私かに膝を打つて成程長亭子のキカン坊たる處はこゝらにあるのであらう、斯う云ふ調子で殆ど靴を脱した汗馬の如く伊藤公にぶつかつたら、道の伊藤公で手こずられた場合があつたであらう、

況んや他をぞと感した。談が了つてから又も盆栽談に逆戻りする、切りに自慢のものを見せられた、何れも天下の逸品であるが、併し其時自分をして恍惚たらしめたものは、床に懸けられたる天鐸の長丈幅であつた。

雙魚堂閑話

初對面録 十 山川健次郎博士

川の再生の恩人だと知れて、博士の壁間に此恩人の幅が掲げてあるのは決して偶然ではないと云ふ事を感じた。嗣つて山川博士の性格を見るに其剛毅の性質、其潔白の人格等、餘程奥平に似た處がある様であるが、博士は餘程此恩人に私淑して居る様である。

雙魚堂閑話

初對面録 十一 落語家圓遊

○若し近世の落語家中に其雄なるものを求むれば圓遊また其一人たる事は敢て自分の論を俟たぬ、自分等は書生時代から即ち圓遊が寄席で例のステテコを遣つた時代からの馴染であるが併し親しく語を交へたのは、紅葉山人が没した後同人相計つて紅葉祭を営むた時であつた。圓遊は其時除典の爲めに招いたので、何か舟



○自分等の大學時代には山川博士は物理學の講座を受持つて、丁度今云ふ高木學校時代即ち當時の豫備門時代に親しく教を受けた事がある、以來頗る御無沙汰の譯であるがアノ位性格を少しも變せぬ人は他にない云つてもよい。其時分に博士は仲々書生を愛せられてよく宅へ遊びに来てと言はれる、或時二三人同級生が誘ひ合せて訪ふた事がある、其時分の邸宅は忘れて仕舞つたが頗る頹廢した荒屋であつたにも拘はらず先生一向頓着ないと云ふ處でも其性格の一端が窺はれる。○座敷と書齋と兼帯の室へ通されて見ると、其室には書物や物理の機械が雜然と散ばつて居る、先生其處に座を組んで行つて一禮を述べるとよく來たと云ふ調子で行きなり座邊にある飯茶碗を取出し、俺の處では普通の茶は飲ませぬ之が茶だと云ふ見舞で一升徳利を傾けて、サア道れと言はるとので銘々顔を見合せた。

を消ぐ話と夜這の語がなぞで例の如く人の顔を解かした。○落語了つて雑談の際自分は圓遊に對つて仲々君の落語も鍛練を経たものであるが併し何れも材料が時勢と遠い様に思ふ我々は君等の如き辨才は有たぬが材料なら幾らもある、我々の材料を落語に仕組んで君等の其鍛練した辨才を以て遣つたならば恐らく落語界に一新生面を開くであらう、一つ落語の改良を計つて見ても可うか、それならば應援しやうかと云ふて見たのが相語るの初めであつた。○其際圓遊の曰く、御尤ものお考だが私共にはトテも出来ませぬ、もと／＼頭に素要がないから人から與へられた材料を取捨するなぞは出来ない、元來私共が高座へ上つて人様のお笑ひを博す事の出来ませぬのは全く自家の實驗を経た事であるからで、それをなければ駄目である、例へば先刻お話しした舟の話や身振なぞは皆な自分が遣つた事であるから兎も角遣れますので、入智恵では到底捌きがつきませぬと白狀した。其際傍に居た野次馬連

未修

が、成程一應尤もの話だ、殊に君の夜這の話をなんぞは甘いものだが定めて夜這の實験も澤山あらうなぞと混つ返すもあり果は大笑ひとなつた。
○成程圓遊自身の白狀の如く、彼等の如く極めて頭の低い連中には幾ら話の筋が面白くも之を頭の中に陶浴して自家のものとなすかの如きは出来まい、當代の落語界に之を望むは無理の注文であると感

雙魚堂閑話

初對面錄 十二

○一六翁に會するの機會を得たのは餘程妙な折であつた。今より十六年前自分は新潟の客舎に病むた事がある、其際翁は恰も自分と宿に同宿をして丁度自分の臥して居る二階に陣取つて居つた。
○翁は筆を取るのが商賣を別に酒も嗜ま

ない、従つて日中は至極靜穩であるが扱て夜間になると閉口するのは、先生義太夫が大得意だと云ふ譯で、加ふるに旅館の息がまた義太夫の名人と自稱するので連がある云ふ處から夜分になると呻り出す、巧拙は兎も角兩人懸合の語りなどとなる如何にも騒々しく、階下では人と話をしても少しも聲が聞かぬ計りでなく、一夜の中に五段七段と云ふ殆どノベツ幕なしの藝當で、甚しきに至れば十二時に至ても猶已まぬ、斯様な事が数日續いたので病臥の自分には少なからず惱まされた。
○處が翁は道に如才がない、自分が下座敷に居て定めて迷惑であらうと感じて、或日態々刺を通じて病床へ見舞はれた、兼て聞く通り體軀の極めて肥大なそれで圓満の調子の人で、初見の人に對して、幾んど十年の知己の如く、満顔溢るゝが如き愛嬌を湛へて先づ開口一番、毎晩御邪魔をして相済みませぬと云ふ挨拶であるから、此方も碎けて、何うか罰金に何ぞ書いて下さいと遣つた處が、それは無

雙魚堂閑話

初對面錄 十三

論何でも書きますと言はれ、座邊にあつた書畫帖など自身で持て行かれて直ちに幾枚も書かれたとがある。それが翁に對する初見にして又最後の面會であつて、其後は逢ふ機會を得なかつた。

雙魚堂閑話

初對面錄 十四

○師が佛敎統一論を著して本山から餘籍の處分を受けた頃自分け之を讀んで深く師の見識に服し何時か逢ひたいと思ふて居た、處が丁度其頃秀英舎で大祝宴會を催した事かあつて自分も招かれて列席した。フト自分の席を二三隔てた席を見ると村上專精殿と書いてあるので之はよ

村上專精師

い折と思ふて應て宴會の席を終る頃に起つて村上師の傍らに行き自分の名を云ふて挨拶をする、向ふはデット自分を凝視した儘須臾の間語を發しない。
○之は何う云ふ事かと不審に思ふて手持無沙汰に控へて居ると師は呆然たる態度で頗る不審そりに「ハア、貴君ですか」と云ふ、自分は益々妙に感じて全休何う云ふ譯ですかと反問すると「貴君の名は久しく聞いて居る。併し何うも恚んな若い人ではない筈だ」と云へ出したので、ハア之は長らく自分の名を聞いて居るので餘程の老人と思つて居るなと氣がついて、自分は笑ひながら何う致しましてかと「貴君よりは十歳位は違つて居る筈ですと云つたので、師も笑ひ出して、實は久しく名聲を聞いて居るので今少しお歳が老けて居るであらうと想像して居つたのでありますと云つて、互に大笑をしたが、爾來頗る懇意な關係になつた。
○師は頗る苦學の人で、曾ては水原の某寺に寺男まで勤めて風呂の火を焚きながら讀書したと云ふ位な人で、新潟縣は縁故のない譯でもなかつたから、多分其時代から自分の事なんぞを聞知して居られたものであらう。

雙魚堂閑語

初對面錄 十四

下田歌子女史



○今より十二三年前自分が神田仲猿樂町に住居の折或時刺を通じた一婦人がある之を見れば下田歌子であつた、何う云ふ譯で訪ねて来たかと訝かしく感じたが兎に角客間へ通じて見ると成程疑ひない歌子女史本人であつた。

○女史は大隈伯から紹介されて来たので其用件は茲に云ふ必要はないが、自分は此時初めて女史を見た譯である。其頃の女子はまだ四十になつたかならぬ位の年輩で年よりは頗る若い人柄、髪は無論束髪で何か綾のある黒の被布を着て、情が質實な羅紗の様な袴を穿いて居た様に覺えて居る。

○此人に對しては自分も久しく兎や角の話を耳にしてゐた事であるから物好んで興味を以て暫く接した。用件は直に済むだが女史仲々座を起たす切りに談する、自分も可成引止めていろ／＼談じて見ると、辯舌如何にも爽やかにして多方面に亘る議論の中聞くべきものも尠なくないので、應接の間に成程女界の怪傑と諡はると丈の價値はあると感した。

○自分が世話をした事が幸に功を奏したと云ふ事、爾來切りに書簡を寄せ或は物を贈られた、僅か一回逢つた計りの自分分對して送らると書簡の如きも殆ど十年の親交の人に與ふるが如き風情があつた、尤も漸る傾向は得て女流に多くあり勝ちの事ではあるが、此人の遣方は際立つて振つたもので、此一事に於てすら如何に女史が人を惹付ける力に富むでゐるかを窺はれる。世間の種々なる人が女史に惹付けられ、時に剛毅村訥式の丈夫漢が兎もすれば此人の爲めに戯弄せらるゝと云ふは決して偶然ではない。

雙魚堂閑語

初對面錄 十五

大石正巳氏



○大石正巳君との初對面は自分が某縣の某社に筆を操り傍ら一黨を率ゐて居た時分、其頃大石氏は後藤伯を戴いて大同團結を形成らんとて自分の所在縣へ遣つて来たので、在京の自分の友人も多く大同團結に左袒をしたが大石君は東京を擧する時に之等の一人々から某縣に入らばアノ男

を一人口説落せばそれで事が定まると云ふ事を聞いて、縣へ來ると劈頭第一に刺を自分に通じた。

○其頃の正巳君はまだ年も若く仲々堂々たる偉丈夫で今でも覺えて居るが黒の洋服姿で例の眼鏡は此時分から懸けられてあつた。一体が豪放の氣質、餘り物に頓着せぬと云ふ様子であると云ふ事は、折角後藤伯を擁して非常に重要な任務を帯びて縣に入りながら、格別其用件にも亘らずして自分と共に三日間酒に沈溺した一事でも判かる。人動もすれば大石君が酒略を欠くとか或は要領を得ぬとか云ふが、併し其汪洋として大きい處があるのがアノ人の特長で、自分は此時初めて成程大きい人物であると云ふ事を感じた。

雙魚堂閑語

初對面錄 十七

福地櫻痴居士



○現在は銀座街頭に魏々たる大夏高樓が盛に起つて何れを甲とも定め兼ねる位の大建築があるが、今より卅年前の昔に遡つて見ると尾張町の日報社といふものは銀座街中の壯麗とも云ふべき大建物で實に威儀堂々たるものであつた。之を本營として筆陣を張つたものは日報社の吾曹先生と筆名を受けた福地源一郎其人であつた。

○當時吾曹先生の文名非常に擧り年少の書生輩の景仰甚しく自分等大學生と雖も私かに敬仰する位のもので、一度は其人に會して議論を闘はして見たいと云ふ事が我々の希望であつた。處が幸にも同窓の一人たる現今の衆議院副議長の關直彦氏が翻譯か何かの仕事の爲めに日報社へ行つて居たので、氏の紹介で或時訪問した。

枚重ねと云ふ着付に縹紗の派手な帯を締め、黒縮緬の羽織をはきつて紐も縹紗の様な平打のものを結んでゐると云ふ打扮で、何だか俳優の様でもありまた殿様に見えると云ふ様子である。併し道がに江戸趣味を深く吸収し狹斜の巷に入浸つてゐると云ふだけであつて、服装の綺麗びやかなる割合に厭味を覺える様子は見えないが、去ればと云つて一見して之が當時の廟堂の意見を代表する文章家の大達者などとは見られぬ態度江戸趣味の然らしむる處何處かに俗氣の附纏ふ心地せられた。之が吾曹先生の全盛時代で、書生輩などを敵手に議論を闘はずなどは思も寄らぬ態度である。○自分等の訪問したのは其時分我々の著はした議論に對し居士が異論を拵んだと云ふ事をキツカケに關の紹介で出掛けたのである。我々は同窓三人で面會をしたが數月間練りに練つた議論を携へて行つた譯であるから吾曹先生如何に議論に長じて居るとは云ひ、仲々單純な論法では我々を屈服する事が出来ない、論戰は

一時間半位にも亘つたが仲々議論が乾かぬ、其時熱々感したのは決して居士の論旨には服さぬが、如何にも論法が老練で兎もすると居士の設けて置く罠の中に陥らんとする事が一再ならずあつた、右を衝けば左へ逃げる、左を打てば右へ走ると云ふが如き論法で、居士の議論の危く見えると又陣立を立直す、其具合の巧妙なる事道に政府の政略を辯護して人をして納得せしむる人物丈けあつて、到底居士を説破する事が出来なかつた。自分等は半日も論戰する積りであつたが、まだ社説が書きかけた儘完結に到らぬとて紹介者たる關が傍らにあつて言ふので、その邪魔をしてはならぬと考へて引取つた之が全盛時代の櫻痴居士を見た初めであつた。

○紙が貼つてある、之は訪問客に長談義を闘る趣意である。通つて見ると居士は机に凭つて小説の起稿中と覺しく切りに書きかまつて居る、自分は其際居士を煩はすべく一篇の小説を頼みに行つた譯である、居士は書いて上げてよいが私の原稿は一枚一圓であるがそれで宜しくばと云ふ挨拶。之を聞いた自分は既往の全盛時代を追想し、如何にも氣の毒の思ひがして頗る今昔の感に打たれた。

雙魚堂閑語

初對面錄 十七

○それより後十數年自分は或る都下の有力なる新聞の主筆として再び居士を訪問した事がある。構むべし其時は居士既に日報社を退き、歌舞伎座に手を焼いて落魄江湖に呻吟し小説家と迄成り下つて築地邊に二間計りの小屋を構へて、其所へ日々出張して小説を日課として居た時で

○草履袴や袴才のある中に小ぢかたる邸宅が構へられてあつた。應接所に通

た
○當時吾曹先生の文名非常に揚り年少の

枚重ねと云ふ着付に縹紗の派手な帯を締
め、黒縮緬の羽織をはきて紐も縹紗の

▲津田仙翁

○自分は宮城の濠端を通過し緑陰水に映するの並樹を見る毎に津田仙翁を想起せざるを得ない、實に此並樹は北亞米利加の津物アカシヤと云ふ、津田氏が初めて日本へ取寄せ東京府に勸め、市街に栽える事を計畫した樹である。

○自分の津田氏を訪ねたのは書生時代であつた、學生團が先輩を招聘して講演會を開くので其出席を津田氏に頼みに行つたのが初めである、氏の居は麻布の儲か新堀町にあつた頃と思ふ、其時分に學農社と云ふものは無論成立して居り且つ氏の經營に係る農學校も既に設立されてゐた頃である、當時津田氏の農學校は勿論唯一の農學校で、津田氏は日本に於て農學校を初めて設立經營した元祖とも云ふべき人である。

○其時分は非常に土地の價額の廉い時で氏の邸宅は餘り立派なものとも思はなかつたが、其宅地は如何にも廣潤で、いろ／＼の草花類や樹木のある中に小やかなる邸宅が構へられてあつた。應接所に通

十八日 中野

雙魚堂閑語

初對面錄 二十一

平沼專藏氏

○平沼專藏と云へば大阪に於ける鬼權と人は並び稱する高利貸、其高利を借りて多くの人が破産をしたと云ふ事からして世上に蛇蝎視せられてゐる、乍併平沼は蛇蝎でも鬼でもなく逢つて見れば仲々に面白味もある、自分は今より十数年前或事柄に關して屢次此人を横濱に尋ねた事がある、無論其頃は平沼が既に成功して大成金になつた時分だ。

よいのを意外に感じた。○いろいろの話の中に自分から貴君の起身談を聞きたいと云ひ出した處が先方も大得意で、實は自分は養子で龍甲屋へ嫁に這入つたものである、それが頗る微々たる家であつて自分も其頃は之ではならぬと云ふ考へから非常に働いた、殆ど三食の中一回を省き、月代なども髪の時分には三四日に一回通るのが普通であるけれども自分は凡て自分で済まし床屋へは一回も行った事がないと云ふ位大變に苦勞しましたと云ふ様な微賤時代の話も出て来て、追々話を居ると全体世間で平沼を蛇蝎の様に云ふが、恁んな男が何の蛇蝎と疑はるゝ程極めて穩やかであつた。

○それの中にも初めに本問題に移つて金の事を談じ初むると、平沼先生忍ち居直つて俄然調子が變つて来た、實は此時の訪問は或人の爲めに借金始末をうける談判の爲めである、此方から持出す事柄は無論平沼の不利の事であるから何うせ受のよい事ではあるまいとは期して居たが、初て未問題に入ると忽ち

雙魚堂閑語

初對面錄 二十二

長谷川芳之助氏

○今こそ越後に行くには信越鐵道一線に依るものよみであるが今より廿七八年前

と早速に出て迎へられた、其頃の氏の年輩は一寸四十歳位と肥臆して居る、ハツキリとは分らぬが少し薄鬼石で、所謂中肉中骨の恰好であつたが其態度應接振が如何にも眞率であつて、當時斯界の大がたるにも拘らず謙遜の態を失はず、應接の間は全く春風の室に居るが如き心地がした。

事の出来ぬと云ふ事である爲め、鍋茶屋の主人を喚んで私の凡ゆる所有品は君に任せるから何でもして呉れ、何しろ兵亂が起る譯であるから是等の物が何うなるか分つたものではない、無くなつても構はないから勝手にして呉れと云つて、比喩的澤山持つてゐた書物或は洋式の銃劍其の他雜品を其居室に在るまゝ鍋茶屋主人に托した、然るに後から聞いた話であるが鍋茶屋の主人は感心なもので、自分が立去つた其後に一切のものを濱手の松林の中へ持行き、長々雨露に晒されずとも損ぜぬ工夫して積重ね、外部は鴉を以て圍み、誰も此中に斯様な物があるとは氣付かぬ様に装ひ數年の間其儘に保存した。

津田先生農學家の事であるから問はず語り諸々なる農藝談が初まり得意の津田細の事も出た。それから西洋から取寄せた果樹其地の講釋に移るや主人は起ちて試作場なる手廣き庭園に案内せられ、一つの小さな樹を指して云はるとには、之は北米の産でアカンヤと云ふ樹である外國では重に鐵道の枕木に使つて居るが夏になると非常に蔭をなす樹で市街へ栽えるには適當の樹木である、日本でも行々東京市中にも栽えて夏時の綠蔭を作らるゝ様にしなければならぬと熱心に説かれた。

即ち明治十八九年頃は、まだ鐵道も開けず、捷路を東京から取る時は多く清水越を撰むたものだ。自分は或年家族を引連れて東京から雪中清水街道を通つた事がある、此街道は自分が書生時代より數次通過した處であるから、山中の模様も雪中で多少變つて居るが自分がよく路を知て居ると云ふ自信から、案内に來た人足と共に家族は先に遣つて自分は捷徑を行く積りで獨りでポック／＼出掛けると一人の道運が來た。

○それは洋服姿の人で、人品も卑しからず、年の程は自分より少しも長じて居る位に見受けられ、精ギスの頗る背の高い人で、私も新瀉へ行くのであるが不案内であるから何うぞ御一所に願ひたいと云ふ。自分は先に立つて捷路と信する方向に向つてドン／＼行くと追々と勾配のあつた下り坂の方へ這入る、まだ路を失したとは氣づかぬので兩人とも靴足でドン

下る、すると路間の様な處へ出たけれども猶ほ前進を續けると今度は深い谷合に入つて路は全く絶えた、あたりを見回せば兩側は見上げる計りの山坂で我々は恰と藥研の底の様な處に居る、ソコで初めて氣がついて見ると、行手の二三町先は霧の最端でそこは懸崖絶壁とも云ふべき處である事を覺つた。

○此に於て案内者なる自分は、大に面目を失はざるを得ない、已むを得ず來時の路を戻らうとして見ると下りにこそ無暗に駈け降つたものとイザとなると靴足でも容易に上り付けぬ程の急勾配だ、サラバと云つて此に止らんか路間であるから下は水の流るゝ様子で兎もすれば陥らんとする危険がある、已むを得ず兩人とも樹の上りついで漸く澗りを免かれて居る。

一方の道連先生は非常に困つた様で、顔色土の如き有様に泣くが如くに自分云ふには、之は困つた、連が貴君でこそ安心だが實は私は大金を擁して居るのだ自分の身体は兎も角金には困つたものだと言ふを吹くので、自分も案内の責任上トク氣の毒に考へたが、態と聲を勵ましナニ開んなに弱るには及ばぬと思つて居

る中に、幸の事には見上げる荷高い山の上り人語が聞える、ソコで兩人とも聲を限り叫んで救を求めたが其の人語も暫らくにして絶えたので、救ひか來るか來ぬかと云ふとも疑問となり非常に煩悶を極めた。

○然るに幸にして救を求めた叫聲が通行人に徹したと見え十四五分を経過すると、更に人語の聞ゆると見る間に救は來た、ソコで兩人とも狂せん計りに喜んだ、下世話に云ふ地獄で佛とは全く此時の感じである、此に於て自分は俄かに元氣がいで今迄攀登る事を難んじた雪の峻坂をもやす／＼と登つたが、一方の道連先生は弱り果て、其救ひに來た人間より遙かに脊の高いにも似ず小兒の如く背負はれて漸く本道に出た。

○新瀉へ着いた後遺難の紀念に一杯傾けやうぢやないかと云ふ事で、兩人某酒樓に會して一席の宴を張つた事がある。此道連先生が此頃歿した工學博士長谷川芳之助氏である。

雙魚堂閑話

初對面錄 二十三



○濞澤男に初めて逢つたのは今より十二年、三年前、兜町の元の本邸今は日々の事務所に充てられてある所であつた。朝早く出掛けると應接室には既に數多の人が詰掛けて居る。其中に馬車の音が聞こえ主人公

が遣つて來たと思ふ間もなく應接室に待つてゐる人に應接をする、自分は應接室に居つて自分の順番迄には仲々時間が経かであるであらうと思ふてゐると、前の人々が段々呼ばれて二三人となつたと思ふ間もなく存外早く自分の順番に到着した。

○そこで男の室へ案内されて見ると此室は西洋室で、卓、椅子等相當の設備はあるが併し極めて質素なもので財界の霸王らしき綺羅びやかなる裝飾などは一尙見

ない。主人は洋服姿で例の温厚なる容貌、其時分はまだ今日程に肥満しては居られなかつた様である。主人は其節椅子を離れて起つて居らるゝので自分も挨拶を了つて立ちながら話が始まり、兩方ももに立つた儘で十二三分も談話を交へ用はそれにて済むだ、格別込入た話では無論ないが、仲々應接に馴れた人だけあつて、話がよく捌け要點々々に就て明確に挨拶を與へらるゝ態度は實に感心なものである。加之人に對する言語も極めて丁寧なるものであるが、鄭重だと云つて贅言などの爲めに無駄の時間を空費するが如き事なく、立ちながら僅々十二三分で話が決して直ちに辭して別れた。

○後より聞けば立つて應接對話するのが濞澤式である、一日多數の人に面會するのに互ひに腰を掛けては座が長引く、仍て男爵は大抵の場合立つて居り従つて客にも席を與へぬのが其時分の男の應接式である。と聞いて初めて其意味も判かり、また自分より前に行つてゐた訪客の話が意外に早く済む次第も漸く會得した。男も追々老境に入られたから現今では起

つて應接する事もない様子である。

○男は此頃では王子の別荘から毎日通ふて居らるゝ、自分が此王子の別荘へ訪ふたのは今より三年計り前の事であるが早く行かないと面會が出来ぬと云ふので、六時頃起きて俵を驅つた事がある、客間へ通されて暫く待つてゐると、すぐ其傍に電話があつて執事が種々なる方面に於て居るのを聞くとともにしに聞いてゐると、之は皆な濞澤家から他へかける電話である、今日は何時に行くと誰々を呼んで置けとか、何處其處の集會には何うせよとの類で、引續き五六個所の電話は悉く働かけの電話であつた。就中一ツ感じた事は男が力を入れてゐる養育院

が其時分建築か何かを遣つてゐたのを、今日は何時頃見に行くが誰か當局の人がゐるか云ふ問ひに對して誰れも居らぬと云ふ挨拶であつたが、それでは困ると云ふ様な事で切りに詰つてゐる、自分は之を聞いて成程活動家の日中行事の第一は、先づ早朝から電話をかける事であり、朝の電話の忙しいのも無理ならぬが

雙魚堂閑語

初對面錄 二十六

中井敬所翁

近世篆刻の大家を論ずれば誰も異口同音に中井敬所を稱す、敬所は實に印界近來の泰斗に相違ない。自分も印癖があるから此翁とは屢次來往したが、或時友人故文學博士横井時冬の紹介で敬所翁が自分を訪ねて來られたのが初見である。其時は自分が豫ねて種々なる印譜を藏してゐると云ふ事を開れて來たのである。何としても此翁は印譜の通人で、有名なものも幾んど知らぬものはない、此人に觀せるには餘程珍しいものでなければならぬと思ふて自分は僅に二三を取出して示した處が、其中一點だけは極めて珍しいものであると激賞せられた。序

○其際に此印を押したいと云はると儘白紙四五枚差出した處が、翁はそれを一々三枚の紙に押し、一枚は自分に與へる、一枚は刻者の名を註し、他の一枚は、一枚は私に頂戴する一枚は知人に與へると云はれたが、如何にも印に忠實であると云ふ事に感した。

○去るに臨み先刻切りに激賞された印譜を兩三日貸して貰へぬかと云はると、お易い御用何時迄も御覽なさいと云つて滑つた、スルト兩三日経つてまた翁が見えた、逢つて見ると先日拜借ものを返却に來たと云つて差出したので、自分は御老體が能々お持下さるには及ばなかつた、御序に使用でも持たせられるは宜いのにと云ふと、貴重ものを万一の事があつてはと云ふ挨拶に自分は更に翁の老實なるに驚いた。之より後自分も屢次訪ねて翁を請ふた事は一再ではなかつた。

○翁は其頃既に七十前後で風丰は唐本によくある仙人の肖像其儘で、清瀟瀟の如くとも形容すべきものであつた。一休何事に就ても趣味が廣い、殊に其記憶の非凡なると其氣魄の壯なる事には驚かざるを得ない、自分は翁の絶刻を二三顆藏し

てゐるが、其刻が水際立つて如何にもスツキリとして之が七十歳の老人の鐵筆であるとは何うしても受取れぬ位若々としてゐると云ふに見ても、翁が如何に氣魄に富める精力家であつたと云ふ事が窺はれる。

○或時自分の祖先の印を三四顆携へて鑑定を需むる爲め翁を訪ふた、處が翁は此時病に臥して居らるゝのを初めて知つたので、遠慮して歸らうとする差支へないからと云ふので病床に案内せられた。餘程の重患と見えて豫て覆せてゐる老人殆ど骨と皮を存するのみと云ふべき有様なので、一見甚だ氣の毒に感した。併し老人は頗る平氣なもので、自分の方で遠慮するにも拘はらず先方から印を鑑定しやうと云はると儘印を示した處が、傍にある机の上から虫眼鏡を取つて一々それを觀て、例の如く之は誰彼れは何と云ふ様に刻者を鑑定せられた。自分は翁の疲勞を氣遣ひ、早速に辭して去つたが之が翁の世を去る數日前であつたので、即ち最後の面會であつた。

○翁は元氣者で斯程の重病でありながら猶ほ最初の頃は老人の冷水とも云ふべく病床で奴豆腐で一杯を傾けると云ふ様な元氣で、それが爲めにも多少病勢を速めたと云ふ位で、實に世界の爲めに惜むべき人であつた。將來技術の上にては或は翁の如き人が起らぬとも斷言出來ぬが翁の如き該博なる學識と燃犀の鑑定力とを有する人は再び世に顯はれやうとは思はれない。翁を失ひしは世界の大打害と言はざるを得なハ。

雙魚堂閑語

初對面錄 二十八

雙魚堂閑語
初對面錄 二十八
▲琳琅閣主人
○東京に數ある古本屋の中で覇權を掌握してゐたものは今は故人となつたが下谷池之端琳琅閣主人齋藤兼藏であつた。此男は福井の生れで東京へ初めて來た時分

は極めて儲積なもので、何を感じたか大道店で聖書を多く集めて賣つた時代もあるが、それが段々發展して十數年の間に遂に東京屈指の大書林となり池の端の錦袋園の跡を引受け書店を開くに至つた。○此錦袋園の場所と云ふものは不思議な縁のある家だ、其昔より東叡山の盛んな時分了翁と云ふ坊サンが初めて不忍辨天の境内に書庫を構へて此に圖書館らしいものを置いた事がある、即ち東叡山附屬の圖書館とも云ふべきものであつた。而して錦袋園もそれに關聯した事業で、つまり此業を買つて其収益を以て書物を殖やしと云ふ處から錦袋園自身が書に關係がある。琳琅閣が其處に居を構へたと云ふ事は偶然とは云ひ不思議の縁とも思はれる。○自分が最初に此店を訪ふたのは十數年前の事に屬するが或時至急主人に直談判をする必要があつて朝飯前に出掛けた、座敷へ通されて見ると主人は別室の佛壇に向つて一心不乱に看經をしてゐる。本願寺派に屬する熱心なる信徒と見えていゝの讀經の末御文章様まであげて漸く出て來て曰く、之が私の毎朝の勤めで

いから、大工小屋から長い材木を運んで来て、それを蒲團の下に置いて、其の同枕として居たが、我れれの腕白運は、夜半帯の熟睡するのを待ちて、件の材木の一端を命槍で叩くと、其の音響が、一列になつて寝て居る大勢の頭を響き渡り、一齊に驚き目を覺まして、狼狽するのを見て、打撃したこともあつた。

▲化物話の一夜 又築地の肥田野先生が、数日丹吳家に泊つて、我々を教授された頃の事。先生一夜無聊のため、我々書生どもを狩り催はして化物話をなし、一話終れば代り線香を持つて奥座敷の上段の香爐に立て、來よと命せられた。全体丹吳家の座敷は、上段まで三つの大きな室を通過して行くので、頗る奥深い。加之、暗中のこゝろであるから、子供心には怖い感じもしたが、併し何れも勇を鼓してやつて

のけたので、先生最後に、是非皆んなを驚かしてやらうと、自分で大夜具を被つて、暗中に徘徊し、幽霊の真似をして、線香を持つて行く者の前程を遮つたので、之れには皆が辟易した。併し先生は酔後夜具を被つて暗中を立ち廻つた爲め、上段にあつた抹茶の壺子を轉動して、多少の破損をしたので、翌朝丹吳老人の目玉を食つた。こんな馬鹿げた回顧は、故郷でなくては出来ぬもので、中々に愉快である。

▲幼時回顧の興味 斯様なわけだから此の西條邊の一樹一山一水一石、皆な多少幼時の歴史を残してゐる。何十年ぶりに歸つて来て見ても少しも様子が變らず、何れも昔のままの面影を残して居る。そして此の木は嘗て木のぼりをして遣り損じたとか、此の川では嘗て釣を垂れ、泳ぎを試みたとか、此の石には、嘗て經上つた山の大將をさめ

込んだことがあるとか、歴々三十年前のことが、恰かも昨日の如くに眼前に浮ぶ。實に幼時の回顧の興味は此の邊に存するのである。

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

△歸省

(幼時の回顧)

▲草庵は西條の公園 今、北堂の住んで居る草庵は、禪僧一行が居り、遠州流の生花を以て界隈に開けて居たのであるが、此の場所は北堂が住むに於いて改築し、境内には四季の花樹を植ゑ、村民の來り遊ぶに任せて居る。即ちこの西條の公園となつて居るのである。嘗て會澤の儒者今泉軸雲といふ人が、丹吳家の世話になつて、此處に一年も居た。譬ではあつたが、よく親切に教

へて呉れた。自分も毎日其の教へを受けて居たのである。先夜この草庵に泊した時は、北堂と夜更ける迄舊話を話して感慨に堪へなかつたが、折ふし雨蕭々として降り來つて、寢に就いた後、其の昔を思ひ出で、色々の事が胸を拂曉往來し、殆んど天明まで眠らず、拂曉起き出で、盥嗽の設けの出來て居るの、わざと前の小川で洗つて試み、長時間其の水を弄して、頗る興感を得た。

▲幾度か夢に入りし川 此の川は幅五尺にて足らぬ細い流れであるが、石が多くて淺く、水極めて清冽にして常に潺湲として流れて居る。川沿ひに長ひ離があつて、野菊などが水に似た花で、今を盛ると咲いて居る様、堪へられぬ趣がある。自分は幼少の頃から此の川を愛して居たが、爾來幾十年、夢寐の間にも忘るゝこと出来ぬのは此の川である。

▲樂しかりし天神講 やがて盥嗽を終へて、村のあらこちを散策して見たが、舊識の民家は何れも面目を草のすして其のまゝに存在して居り、豆腐を賣る家、菓子賣る家など、皆な昔の通りである。村には縦横の徑があり、隨つて村人ならでは知らぬ道も多いが、自分には能く案内を知つて居る。此の附近の人家で、あはれ家ではあるが、手習ひ友達の居た關係から、其の昔六七軒を訪れたことがある。其の頃寺子屋仲間毎月二十五日天神講を催はし、月々輪番で、家の貧富に區はらず宿をす

る定めであつたが、色々の興を盡した末に、其の家で食事を賄ふので、幼時には大に興があつたのである。貧家では大鍋に筍と卵を入れて、玉子とじを作り、皆に御馳走して呉れたが、それがなか／＼旨かつた。此の天神講は全窓の友情を暖めるに大切な機關で、其の趣向であつたのである。斯うい

ふ記憶のある處から、貧しいあはれ家は樂しき回顧を催はし、思はず立ち止つて、一二の家を覗き見た。▲茶屋が青年俱樂部 一村全体を廻るにも一時留とはかゝらぬ。川づたひに村を一週して草庵の前面の村道に出たが、こゝは三叉形に、川が左右に流れて居り、村のはづれともいふべき處である。此處にたしか茶屋が一軒あつた筈と見れば、其の茶屋はいつしか作りかへられ、今は青年俱樂部と大書した看板が掛けられてある。成る程茶屋が變じて俱樂部となつたのも面白い。全体何處でも村端には茶屋があつて、村民相寄つて浮世話を交換するのが常である。矢張り茶屋も一種の俱樂部であるから、此處の茶店の今青年俱樂部に變じたのも、齋藤淺からずと獨りうらなづき、草庵に歸れば朝餉の支度既に満ち、北堂の心を盡された、自分

の少より嗜んだ色々の物が膳に附け
られてあつた。久々に郷國のものを
味はつて見れば皆な趣味あり、別けて
後園の野菜を入れた味噌汁、鮭卵の味
噌漬など最も旨かつた。
△家づとの白菊 別るゝに臨み後園の
白菊二三株を根こぎにしたが、これは
先考が二三十年前、京都よりわざ／＼
移植されたもので、今は籬何十間を飾
るほど繁殖して居るのが、いかにも
奇麗なので、家土産として東京へ持歸
るが爲である。(此項完)

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

△腦と手

眞言秘密の奥儀 眞言秘密の奥儀は、こかいふを聞くに、手の筋は腦體と近接の關係のあるもので、腦の状態、即ち詳しく言へば喜怒哀樂の情のごときは、歴然手の筋にあらはれ、能く奥儀に通ずるの相者は、容易に判断するこゝとが出来るとは、かつて或る高僧から聞いた話であるが、西洋癖のあるものは、一概に之れを老婆だまかしの説となし、西洋解剖の術に於て、かゝる説を容れずとて、頭から排斥してしまふやうであるけれども、余は輕々に排斥す可き説とは思はれない。少なうも研究の價のある説と思ふのである。

何れいふに、手は頭腦と近接の關係を有し、手の一舉一動は直ち腦に及び、其の變化の模様は映して直ちに顔貌にあらはれること、何人も實見する所であるからである。例へば双手を伏せて膝の上に置き、正座した時の顔貌と、双手の掌を外にあらはし之れを膝に載せた時の顔貌とを對照して見るに、仔細に注意せば、其間自から顔貌あるを認めるであらう。掌を伏せて膝の上に置く時の顔貌は、端然として、目鏡く口閉ぢ、自ら威があり、又侵す可からざるの態がある。之れに反し掌を外にあらはして双手を膝の上へ置き、時の顔貌は、何となくしまりなく、何となくゆつたりとして、目も威なく、口も開いて、だらしのなき觀がある。彼の人と談話をしやうとする時に、人多く座を直して手を膝に置くのは、一は正座の態度を以て威嚴を人に示すためである。

るけれども、其の顔貌に威容あらしめるのは、全く手の働きの表ることである。ふてもよいのである。犬よけのまじない 又別に一例を取つて、同じことを言はうに、我國の風俗に犬を恐るるもの、犬に遇つた時には、イヌ、イ、チ、ウシ、トラと指を屈し、寅に至り指を緊握して犬を見る時は、犬必ず走つて避けるといふまじないがある。試みに之れを實驗に徴するに、犬は果して避けて我れに迫らな

ある。又既に此の間に斯くの如き近接の關係がありとすれば、手の筋のごとき纖巧なるインデケートルに其の働きを示すといふも、甚だ理に合ふものがあるやうである。余が手相といふものあ、研究の價ありといふのは之れが故である。

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

△寒山拾得の舊跡

霞客遊記中の記事 霞客遊記を讀んでみた處、巻首に遊天台日記(浙江)を載せてある。寒山拾得の舊跡は如何と讀んで行つたが、果して其の遺跡に關する記事がある。初五日有雨色不顯取寒明雨巖道由寺向西門不見騎々至雨亦至五十里至其頭雨止騎去二里入山峯榮水映水秀石奇異甚示之一溪從東陽來勢甚急大若夢銀回顧無復負奴背而淺深過於膝移

渡一瀾幾一時三里至明巖巖爲寒山拾得隱身地兩山廻而志所謂八寸關也八關則四圍峭壁如城最後淵源數丈廣容數百人洞外左有兩巖皆在半壁右有石笋穿壁上齊石壁相去一線青松紫蕊相結於上恰與左巖相對可稱奇絕八寸關復上一巖亦左向來時仰望如一障及登無上明徹容數百人巖中一井曰仙人井淺而不可謁巖外一特亦高數丈上岐立如兩人僧指寒山拾得云入寺飯後雲陰潰散新月在天人在廻崖頂上對之清光溫壁 書家の寒山拾得を寫すもの、腦中この風景を置かざれば、名畫を得ることが出来なからう。

△韓非子と坂本龍馬

和漢同一揆の言 昔の韓非は、事を擧ぐるの注意を彫刻にたとへ、「刻削の道、鼻は大にするに如くはなく、目は小にするに如くはなし。鼻の大なるは小にすべけれど、大なるは小にすべからず、目の大なるは小にすべけれど、大なるは小にすべからず、鼻もまた

△紅葉山人の雅號

た然り、其の復す可きものをなせば則ち事の敗る、寡なし」と言つた。坂本龍馬が、「凡そ大事を料理するには先づ薄墨にて描くを可とす、あまり濃くしては取り返しつかず」と言つたのと、同一揆の談である。

春城夜話

(市鳩謙吉氏)

△火山の本来本元

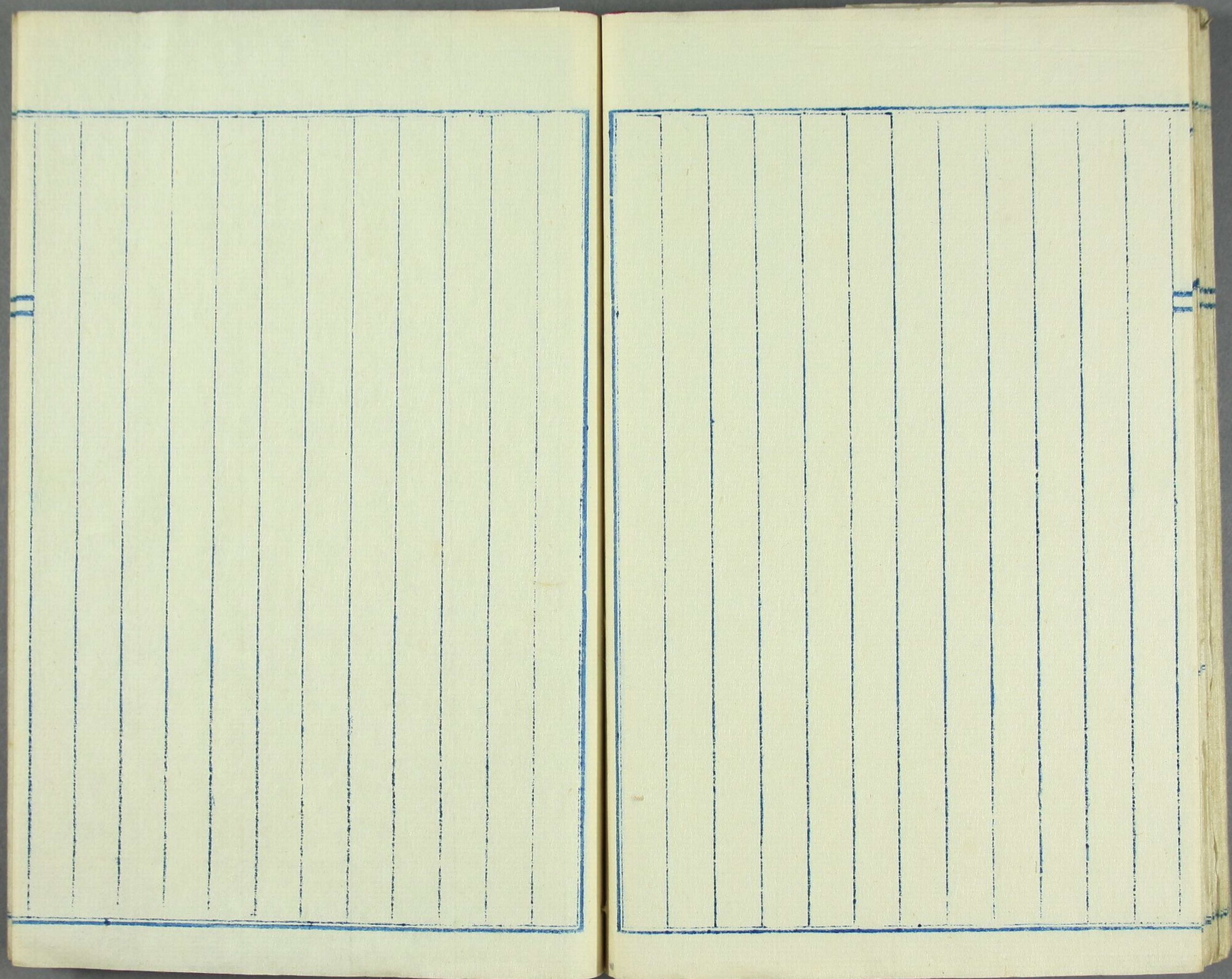
▲西洋人と火山の智識 西洋の地理學者や地質學者の著いた教科書などを讀んで見ると、火山の講釋や火山岩の説...

山の富士を、見ざらんとしても得ないのである。

▲日本觀光の目的 西洋人が日本へ來るのは、いろいろの目的があらうが、觀光などのために來る西洋人の主たる目的は、先づ日本の火山を看んだ...

△有栖川宮家の御名乗

▲有栖川宮家と號の字 有栖川宮家で、五世職仁親王より六世職仁親王(七世職仁親王を除き)八世職仁親王、九世職仁親王まで代々號字のついた名を選まれたさうな。然るに前記の付く字はあまり多くなく、且つ思はしい字も乏しいので今度はその省きだけ付く字を選ばるゝことになつた...



以下全て
白紙

